

2016 年度「国際哲学特講」 アルザス研修（報告）

安孫子 信

1. あらまし……………1 頁
2. 研修の詳しいスケジュール表……………2 頁
3. ストラスブール大学黒田先生の合同ゼミ評…4 頁
4. 参加学生の言葉から……………5 頁
5. 写真でたどる 2017. 2 アルザス研修……8 頁

2016 年度「国際哲学特講」アルザス研修（報告）

あらし

■はじめに

法政大学哲学科の選択必修科目「哲学特講」の一つ「国際哲学特講」（秋学期 2 単位）では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力の下で、学期の最後、2 月初めに、ドイツのハイデルベルグ大学とフランスのストラスブール大学で、それぞれの大学の学生と、合同ゼミを実施しています。この合同ゼミは、2 つの大学でもそれぞれ半期の正規授業の最後の行事として、必須のものと位置づけられています。2016 年 8 月に、2 月に行うゼミのテーマを共同で選定することから始め、9 月から 2017 年 1 月まで、それぞれの大学で準備のための授業を展開した後、「国際哲学特講」の海外研修期間中に（2017 年 2 月 5 日～2 月 12 日）、まずハイデルベルク大学、ついでストラスブール大学の順で、合同ゼミを実施しました。

■合同ゼミの内容

今回の研修では、2 月 6 日にハイデルベルク大学で、ハンス・クレーマ先生ならびにクレーマ・ゼミの皆さんと、「アーノルド・ファンク監督作品映画『新しき土』」をテーマに、合同ゼミを行いました。第 2 次世界大戦時にナチス・ドイツが同盟国である日本を自国民に理解させるために作ったこの国策映画が描き出す日本像を基に、戦前と戦後で日本に本当に断絶・変化があったのか否かを、ドイツとの比較で論じ合いました。また翌 2 月 7 日にはストラスブール大学で、午前と午後の二回、黒田昭信先生ならびに黒田ゼミの皆さんと、「加藤周一著『日本文化における時間と空間』」をテーマに、合同ゼミを行いました。加藤が時間と空間の観点から巧みに取り出してくる日本文化の諸特徴について、それを本当に日本に固有なものと主張しうるのか、そもそも文化的アイデンティティなるものは存在するかを、様々な視点から検討しました。それぞれの合同ゼミでは、日独、日仏双方から、パワーポイントを使った問題提起の発表がまずあり、それに続いて、グループで、また全体で討議が行われました。翌 2 月 8 日には、ストラスブール大学で、同大学のエヴリン・オドリ先生が特別に行って下さった講演「小林多喜二とロマン・ロランの反戦国際主義」を聴講しました。最後 2 月 9 日には、CEEJA で、ストラスブール大学博士課程のボエラーさんが「陰陽道・天文道と日本の古代史」と題したレクチャーを、法大生のために行ってくれました。

■見学、観光とガストロノミー

以上のかかなり密な研修の合間を縫って、ハイデルベルク旧市街（ハイデルベルク城、学生牢など）、ストラスブール旧市街（大聖堂、ロアン宮、プチット・フランスなど）、コルマル旧市街（ウンターリンデン美術館など）、セレスタ旧跡（サン・ジョルジュ教会など）、オーケニスブール城、その他、キーンツハイムやエギスハイム、リクヴィルといったアルザスの美しい村々を見学しました。また、食文化で知られるアルザス地方の郷土料理（ベッコフ、シュークルト、タルトフランベなど）や名産のワイン（リスリング、ゲビュルツトラミネールなど）も堪能しました。

■授業以外での学生間の交流

2 月 6 日のゼミの後、ハイデルベルグでは、ゼミを一緒に行ったハイデルベルク大学生たちと昼食をともにし、旧市街の見学も一部分を一緒に行いました。またストラスブールでは、一日ゼミの日であった 2 月 7 日、ストラスブール大学生たちと昼食や夕食をともにしたのはもちろん、その夜はともに CEEJA に宿泊し、飲み会も含む楽しい交流の時間を持ちました。またその翌日 2 月 8 日のストラスブール旧市街のグループでの見学には、ストラスブール大学生たちも同道してくれました。ゼミでの議論を通じてのものとはまた別の、このような打ち解けた交流も活発に行われました。

■ドイツとフランスの大学の日本学科

ゼミを一緒に行ったのは、ハイデルベルグ大学、ストラスブール大学の日本学科の学生たち（主に、修士課程生）です。研修中、ゼミでの発表や議論、またゼミ外での交流も、大部分は日本語で行われました（ハイデルベルグ大学での法政側発表だけ、英語で行いました）。確かに彼らは日本語を専門に学ぶ大学院生のたちですが、それでも日本語歴は 3-4 年程度です。それを考えると、毎年のことですが、彼らの日本語の運用能力の高さには驚かざるをえません。あるハイデルベルグ大学生の話によれば、学部 1 年次の日本語の授業時間は週 16 時間だったとのこと。日本学科入学者を 100 人とすれば、そのうちで 2 年生に上がったのは 30 人ほどだったということ。それを聞いて、彼らの見事な日本語力にもある程度、納得が이었습니다。

研修の詳しいスケジュール表

法政大学「国際哲学特講」

2016 年度アルザス研修プログラム

2017 年 2 月 5 日（日）～11 日（土）6 泊 7 日

法政大学参加者：

- ・哲学科学生 15 名（哲学科既卒学生 1 名）
- ・引率 安孫子信

■1 日目

2 月 5 日（日）

15h05 成田空港よりドイツ・フランクフルト空港到着（Frankfurt 着 JL407）

16h00 チャーターバスにてフランクフルト空港到着よりドイツ・ハイデルベルグへ移動

夜ハイデルベルグで自由夕食

ハイデルベルグ・ホテル泊

■2 日目

2 月 6 日（月）

ホテルにて朝食後、ハイデルベルグ大学に向けて出発（徒歩）

9h30 ハイデルベルグ大学にて合同ゼミ

ハイデルベルグ大学日本学科ハンス＝マルチン・クレーマ先生

合同ゼミ「異文化理解と自文化理解—アーノルド・ファンク監督作品映画『新しき土』をめぐって」

ハイデルベルグ大学日本学科生

法政大学哲学科生

12h30 大学学食にて昼食

13h30 学生と共に旧市街見学（学生牢・ハイデルベルグ城）

17h00 チャーターバスにてアルザスへ向け出発

19h00 中途のレストランにて夕食

22h00CEEJA 着

CEEJA 泊

■3 日目

2 月 7 日（火）

7h30CEEJA にて朝食

8h30 ストラスブールに向けて出発

10h00 ストラスブール日仏大学会館にて合同ゼミ・午前の部

ストラスブール大学日本学科黒田昭信先生

合同ゼミ「加藤周一『日本文化における時間と空間』（岩波書店、2007 年）をめぐって」

ストラスブール大学日本学科生

法政大学哲学科生

12h30 大学近隣のレストランにて昼食

14h00 ストラスブール日仏会館にて合同ゼミ・午後の部

17h45 ゼミ終了 CEEJA に向け出発（ストラスブール大学生同行）

19h30 CEEJA にてディナーパックの夕食

夜ストラスブール大学の学生と懇親会（オリガスホール）

CEEJA 泊（ストラスブール大学生宿泊）

■4 日目

2 月 8 日（水）

7h00 CEEJA にて朝食

8h30 ストラスブールに向け出発

9h30 ストラスブール大学宮殿・旧市街・ユネスコ世界遺産カテドラル見学

12h00 自由昼食・自由見学

15h00 ストラスブール大学へ移動

15h30 特別講義／大学宮殿

ストラスブール大学日本学科エヴリン・オドリ先生

「ロマン・ロラン・反戦・国際主義の文学を求めて」

18h00 CEEJA に向け出発

19h00 カイザスベルクのレストランにて夕食

CEEJA 泊

■5 日目

2 月 9 日（木）

7h00 CEEJA にて朝食

9h30 CEEJA オリガスホールにて若手研究者による発表

ストラスブール大学日本学科博士課程ボエラー氏発表

「陰陽道・天文道を通じての日本古代史研究入門」

12h00 コルマルへ向け出発

12h30 旧市街にて自由昼食

15h00 ウンターリンデン美術館見学、その後市内自由見学

19h00 旧市街のレストランにて夕食

21h00 CEEJA に向け出発

21h30 CEEJA 帰着

CEEJA 泊

■6 日目

2 月 10 日（金）エクスカーシヨンの日

8h00 CEEJA にて朝食

9h30 セレスタへ向け出発
10h00 セレスタ市内見学ロマネスク・ゴシック建築
11h30 レストランへ向け出発
12h00 レストランにて昼食
14h00 オーケニスブール城見学
16h30 エギスハイム見学
17h30 リクヴィル見学
18h30 レストランにて夕食

■7日目

2月11日(土)
6h30CEEJAにて朝食
8h00 バーゼル空港に向け出発 (Basel 発 11h10BA749)
※ 乗り継ぎ London12h05 着-19h00 発 JL044Haneda 着 15h55 (翌日)
全移動手段チャーターバス

ストラスブール大学黒田昭信先生の合同ゼミ評

「言葉が開かれるとき ― 日仏共同セミナーを終えて」

2017-02-09 | 雑感

一昨日火曜日は一日、法政大学哲学科の学部生十五名(+卒業生で現在別の大学の修士の学生一名)とストラスブール大学日本学科修士の一・二年生十二名(残念ながら一年生の一名が病欠)との合同ゼミが日仏大学会館(Maison universitaire France-Japon)で行われた。半年前から一学期かけて共通テキストの加藤周一『日本文化における時間と空間』をそれぞれに読んできた学習成果を発表する機会であり、演習あるいは特講の仕上げでもある。

午前、同書第一部「時間」をめぐる、修士一年六名の個別発表と法政側のグループの発表が行われ、発表後若干の質疑応答が行われた。どちらの側の発表も十分に準備されており、それぞれによくまとまっていて、議論を深めるに値する論点もいくつも提出されたのだが、時間の制約と発表形式、まだ雰囲気として打ち解けるに至っていない等の理由で、活発な議論と言うには程遠かった。

午後は、同書第二部「空間」をめぐる、修士二年生六名の個別発表と法政側のもう一つのグループの発表が行われた。こちらも内容的にはとてもよかったと思うだが、発表後は若干の質疑応答以上には議論は発展しなかった。

これには、すべてが日本語でなされるというストラスブール大生の側にとっての大きなハンディあることを措くとすれば、発表内容・形式の問題もあるように思う。今回の結果を受けて、来年度以降、全体の形式そのものを考え直したほうがいいのではないかと思い始めた。

発表後は、四つのグループに分かれてのディスカッションにしたのだが、これはとてもうまく行った。私の予想はいい意味で裏切られ、どのグループでもフランス人学生たちが実に積極的に発言しているのを聴いて大変嬉しく思ったし、彼らが「隠し持っていた」日本語口頭表現能力に驚かされた。

発表時とは、会場の空気もすっかり変わって、活気に溢れた熱度を感じられるようになった。それぞれのグループ・ディスカッションの中で、さまざまな具体例が挙げられながら、論点が次第に絞られ明確になっていった。その日もう少し時間があれば、あるいは翌日にも議論する時間があつたとなれば、さらに議論は発展し深められたであろうと残念に思ったほどである。共同セミナー後の継続的な学習が可能になれば、さらに充実した成果を上げることができであろう。

この共同ゼミのストラスブール側のオーガナイズを担当するようになってこれで三年目になる。前

二回もそれぞれに成果を上げることはできたと思うが、今年は、言葉が単なる一方的な発表言語から双方向的なコミュニケーションの言葉に変わってゆく過程が特に鮮やかに感じられた。自分の言葉が相手の心に届き、相手の言葉が自分の心に届くことで、複数の人間が協同する言語空間が開かれていく、端的に一言で言えば、学生たちの間に「言葉が開かれていく」瞬間に立ち会うことができたのは幸いなことであった。

共同ゼミ後の宿泊場所での懇親会も見えて楽しいものであった。午前零時に散会した後、法政の学生さんたち何名かと午前二時までラウンジでおしゃべりしたが、それもまたとても楽しい一時であった（翌日授業があったのでちょっとしんどかったけれど）。

彼らのプログラムは明日金曜日まであり、翌日土曜日に帰国の途につく。全日程を恙無く終え帰国されることを心より祈念しています。

[※以上は、黒田先生の公開ブログからご許可をいただき転載しました。]

参加学生の言葉から

■—アルザス研修に参加して—

15B0***

私はこの研修を通して、たくさんの人たちと出会い、様々な経験をして、一週間という短い中で、かけがえのない思い出を作ることができました。きっと全てを書ききることは出来ません、その中で印象の深かった人やできごとを書きたいと思います。

まず、いちばん最初に出会ったのは、私たちを様々なところへ送ってくれたコリーヌさんです。彼女はまだ慣れない私たちに素敵な笑顔で *bonjour!* と挨拶してくださり、安全運転はもちろんのこと、ルート変更など、様々な場面で機転を利かせてくれたと聞きました。彼女には感謝してもしきれません。

次にドイツ、ハイデルベルクの学生たちは、物凄くフレンドリーで、初対面の私達にたくさん話しかけてくれました。それまでは、上手くコミュニケーションが取れるだろうか、話し合いがうまくいくだろうか、と心配していたのですが、しかしそんな心配は必要ありませんでした。問題提起の話から、ドイツではこうだ、日本ではこうだ、と話が広がり、物凄く充実していて、楽しかったです。そのあと、一緒に議論した人たちと学食を食べました。そこではたわいもない話をしながら、アルバイトの話や近くに哲学者の道というものがあること、そこは夏に行くとなるととてもきれいな景色が見られる、などのことについても教えて頂きました。一日だけの本当に短い間でしたが、とても充実した時間でした。

そこでもう1人、長きにわたってお世話になる方と出会いました。徳江順子さんです。彼女はCEEJAというフランスの施設の方で、海外な不慣れな私たちのサポートを沢山してくださりました。また、行く場所で歴史を踏まえた建物の説明や、ありがたいお言葉を頂きました。全体を通して隅々まで細かい気配りをして頂き、数えきれないほど助けて頂きました。

フランスでの出会いでは、最初に出会ったのはミカエルとポリーヌの2人です。この2人が私の中でいちばん印象深く、大切な思い出をくれた人たちです。まず、2人はいつも、どんな時も私たちのことを考えて動いてくれました。あとから知ったのですが、いつも朝食の始まる15分前にはスタンバイしてくれていて、誰かが食べ損ねたりしないよう、配慮してくれていたのです。観光でも、いつも先頭と最後尾にいてくれて、誰かがいなくなっていないか、人数があっているかなど気にかけてくれました。古い建物や、村のこと、教会や大聖堂の歴史の話や、この地域での名物、一つ一つの質問に嫌な顔もせず丁寧で、しっかりと説明してくれました。ポリーヌは教会の水で十字を切り、穢を払うことや、椅子に座るときも、その椅子がある列の端に一度ひざまずいて礼をしてから座るなどの作法を教えてくださいました。ふたりとも1を開けば10や20の話をたくさんしてくれました。一緒にご飯を食べる時には、趣味の話や好きな食べ物、研究している内容についての話もしてくださいまし

た。ドイツでもそうでしたが、話していると国や人種の隔たりなんて感じません。むしろどんどん興味が湧いて、たくさんお話したくなりました。私の知らなかった世界を生きている人からの話は、私の狭い視野を、どんどん広げてくれました。

一つ、印象に残っていることをあげたいとおもいます。忘れ物をミカエルが誰のものかと訪ねた時、私はその物を見て、「男の子のものじゃないかな？」と言いました。実際は男子のものでしたが、ミカエルは不思議そうに私を見ていました。理由を聞くと「すぐに男の子のものって言ったから、なぜかと思って、僕は女の子のものだと思っていただけ」と言われました。よくよく話してみると、私はその忘れ物の「色」で判断し、ミカエルは「形」で判断していたようです。これにはものすごく考えさせられました。

また、授業では、またたくさんの人達と出会いました。秋学期からずっと準備をしていて、発表までにたくさんの苦労がありました。テーマを決め、内容を考え、PowerPoint を作って、台本も作りました。何度か皆で発表しあい、先生からのご指導もあり、なんとか形を作ることが出来ました。発表前は不安だらけでしたが、フランス側の先生である黒田先生からも、わかりやすい発表で、問題提起もきちっとされており話しやすい内容だと、お褒めの言葉をいただきました。グループワークでは、たくさん話をしました、そこではまた、日本とフランスの感覚や、意識の共通部分、そして違いを知ることが出来ました。すべての人とお話することは出来ませんでした、一緒に御飯を食べ、何人かは1日だけ CEEJA に一緒に泊まってくれました。また観光にもついてきてくださり、買い物やポストカードの出し方など、丁寧に教えてくれました。

秋学期の初めは、この2月の研修に向けて、まだ半年も先のことだと思っていました。しかし向こうについてからは、時間が立つのがものすごく早く、1日1日がとても短く感じました。最後の2日間はまだ帰りたくない本当に思っていました。私にはもったいないくらいの、本当に、本当に素晴らしい一週間でした。こんな貴重な経験ができて本当に良かったです。

ここから、一番学んだことに入りたいと思います。

まず、私が一番学んだのは、「言語と人」というものです。少し漠然ですが、今までを振り返り、浮かんできたのがこれでした。何度も言うように初めての海外で、本当に不安でいっぱいでした。しかし、様々な人と出会い、支えられ、話し、感じ、素晴らしい経験をこの一週間で得ることができました。それまでは興味はあるものの、少し敬遠していた節もあり、自分から積極的に関わることをあまりしなかったのですが、今回の研修では、向こうの学生たちが日本語を話してくださり、意思疎通が全くできないと言うわけではなかったのも、自ら沢山話しかけることができました。私達は国や人種が違って、わかり合い、思いを通じることができるのです。しかしそこには「言語」というものが大きく関わっていると感じます。向こうの学生たちが日本語を話せるからこそ、こうやって話し、理解し合うことができると思うのです。確かに言葉が通じなくてもある程度は通じることは出来ます。しかし言語が理解できるか出来ないかで、大きく変わってくると思います。痛感したのは、ある日の夕食の時、安孫子先生と、ポリヌ、ミカエルと私の四人席のことです。私はフランス語を選択していなかったのに（選択していても分かるかどうかは謎ですが）3人がフランス語で話している時はまったくわからなかったです。そこで強く、私もフランス語が話せなくとも分かれば、もっと彼らの言いたいことをダイレクトに感じ、通じ合えたのではないかと感じました。

もう一つ、「人」についてです、感想で述べたように、たくさんの人と出会い、その優しさに触れて、ものすごく「人」というぬくもりを感じました。それまでは、海外のひとはこうだ、フランス人はこういう人だ、と勝手な評価をし、それをフランス人全員がそうであるかのように考えていた節がありました。しかしそうではありません。これは日本でもいえます、日本人だからこうだ、フランス人だからこうだ、というのはまったくもってなんの役にも立ちません。確かに、その国の基礎的な考え方は持っているかもしれませんが、人は誰一人として同じ人はいません。人それぞれに個性があり、考え方があり、価値観があります。それを伝え合い、通じ合うことは、これから先の未来、必要不可欠

なことであると感じます。

今後、私は他の「言語」に挑戦していきたいと思います。そして様々な「人」との出会いを増やし、彼らの考えや価値観を知り、自分の視野を、世界を広げていきたいです。

■一国際哲学特講最終レポートー

15B0***

今回の研修における一週間は、私にとって非常に濃密な体験であった。以下では、この一週間についての感想、次に考察へと移って一週間の研修をまとめたい。

出国前、私の国際哲学特講に参加する動機の一つとして、キリスト教文化を体験するというものがあった。キリスト教思想論など、キリスト教に関する授業をいくつか受講し、実際に教会に入って見てみたいという気持ちが強くあり、そしてそれは今回の研修で十分に果たされた。ロマネスクやゴシックの多様、そして多数の教会堂を見学することができ、また建築の他にも、自由時間に立ち寄った美術館では、協力して頂いた現地の大学院生、ポリヌさんに通訳を受けながら宗教画の展示を回ることができた。授業や著作で触れるのみであったキリスト教文化が実感を持ったものになったことで、よりその文化、そして思想への興味が強くなった。また、現地の学生の方々と話をする機会が多く、その中でもまたキリスト教が実際に根付く地で暮らす人々の実際の感覚をうかがい知ることができたように思う。

次にやはりこの研修での大きなイベントとしては、ハイデルブルクやストラスブールの学生との共同ゼミを挙げることになるだろう。一ヶ月以上をかけた準備は大変だったが、当日も同様に苦労した。やはり初対面の者同士、打ち解けるのに時間がかかり、相手に意思を伝える難しさ、相手の意図を汲み取る難しさは「異文化交流」を避けてきた自分にとっては非常にわずらわしく感じられた。それでもなんとか少しずつ話し合いを進めていく中で、日本文化という問題を扱いながらドイツやフランスの意識を垣間見ることができたのが興味深かった。ハイデルブルクにおいてはナチという組織とその時代がどのように考えられているか、そしてストラスブールにおいてはドイツともフランスとも言い切れないアイデンティティの問題やテロ、移民受け入れという問題が日本文化を対象化するうちに浮彫となり、同世代の人間の意識にそうした問題がどのように響くのか、そしてそれにどう答えるのかという点が非常に面白かった。そしてこちらが仏語、独語をほとんど喋れない中、こうした話し合いを成立させてくれた現地学生の日本語能力には非常に感服した。

大きくは上に書いたように、私にとってこの研修は非常に感動的なものとなった。そこにはまた、現地の学生の方々や先生方の情熱に触れたという要因も非常に深く関わっている。安孫子先生はもちろんのこと、黒田先生を始め、現地で出会った先生や学生は知への情熱が非常に強かった。誰もが関わること、考えることを自らの人生や、所属する時代との闘いの中で楽しんでいるような印象を受けた。授業とは別に、そうした先生方のお話をほとんど世間話に近い雰囲気の中で聞けるというのも、私にとってはこの授業の感動した点であった。

ではこういった貴重な体験は私にとってどのような意味を持つことになるのか。まず語学に関しては皆そうであろうが刺激を受けた。語学の勉強に関しては苦手意識があり、現地の学生との話し合いでも私は消極的な態度を取ることが多くなってしまったのだが、リクヴィルでの自由時間の時には積極的な関りができたと思う。店員の方に英語で対応してもらい、下手なフランス語で感謝を伝えたときに、伝える楽しさのようなものを感じることができた。今後はちゃんと勉強していきたいと思った。いま一つの意味は日本文化という今回のテーマに関わるものとなるだろう。私たちは日本文化に焦点を当てているようでありながら、実際にはそれを確定しようとする過程で異文化を見、更にそれはオドリ先生の講義を受けて平和、特定の国ではなく人類へ至るという目的を示されたように思う。だがここには多くの問題が生じよう。異文化交流の難しさは私たちに十分示されている。また人類へ至るということはアイデンティティの喪失を生むのではという問題もある。こうした問題に私はすぐに自

らの考えを述べることはできない。しかしながら、この研修以前とは変わったと思える。人間は日本人やフランス人ではなく、人類なのだと誰かが言っても、以前の私なら当然だろうというような顔をしただろう。しかし今回の研修ではっきりしたのは、当然のような顔をして私が人類と考えるものは決して人類ではないということである。文化の違いを体験すること、これを通して人類は獲得される。ただ部屋で人類は同じだと言ったとき、それは勝手な自己の世界化にしかない。人類と言ったとき、重要なのは越えられるべきものとして現在ある境界を見ることであり、こうした意識の変容こそ、この研修が私に与えた最も大きな意味であると思う。

[※以上は帰路、あるいは帰国直後に執筆された、研修に参加した学生たちの感想レポートから2本を選び転載したものです。]

写真でたどるアルザス研修

[※以下の写真は大部分、研修に参加した学生たちが撮影したものです]

■ハイデルベルグ大学での合同ゼミ



■ハイデルベルク大学でのグループ討論、その一



■ハイデルベルク大学でのグループ討論、その二



■ハイデルベルク大学で、合同ゼミを終えて



■ハイデルベルク城テラスから望む、ハイデルベルグ旧市街とネッカー川



■ネッカー川にかかる古橋からハイデルベルク城を望む



ストラスブール大学での合同ゼミで、法政大学側の発表



■ストラスブール大学での合同ゼミで、ストラスブール大学側の発表



■CEEJA での懇親会、その一



■CEEJA での懇親会、その二



■ストラスブール旧市街



■ ストラスブール大聖堂



■ ストラスブール大聖堂屋上から望む旧市街



■ストラスブール大学でのオドリ先生講演



■キーンツハイムのブドウ畑



■ オーケニスブル城



■ コルマール旧市街



■エギスハイム



■CEEJA 全容、新館



■CEEJA 全容、旧館



■CEEJA から日本へ帰国の朝



■アルザスの食文化



